

---

# 江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

Nakazawakatsuyoshi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

### 【Nコード】

N4675BA

### 【作者名】

Nakazawa katsuyoshi

### 【あらすじ】

これから江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたりを書いて行こうと思います。初めての小説なので緊張します。これからよろしくお願いします。

## 三年生の始業式

あれから2年たった。相変わらず毛利家では「眠りの小五郎」の評判を聞きつけ依頼人が殺到している。その都度コナンは小五郎を眠らせていた。そうしてコナンも明日から三年生。最近心配している事がある。自分の顔が工藤新一になって来ているのだ。蘭も最近不思議そうな目で見てくるし大変だ。

次の日、始業式の朝からの校長先生の話が長くてとても疲れた。少年探偵団は奇跡的にクラスを分けられなかった。

歩美「よかったー。またコナン君と同じで。」

光彦「えー。なんでコナン君なんですかー。僕の方が絶対にうっ！」

光彦は元太に押された。

元太「なんでコナンなんだよー。」

光彦「元太君何すんですかー」

光彦は元太に押し返すと二人は喧嘩を始めた。コナンはその様子を見て呆れていた。

灰原「どう？高校生探偵さん　女に好かれ、他の男がやきもち焼いているを見て？」

コナン「へっ？なんのことだ？」

灰原「あなたって本当に鈍感なのね。」

コナン「だからなんのことだよ。」

灰原「別にー。」

コナン「チェ、なんだよ、教えてくれたっていいのによ。」

灰原「よろしくね。」

コナン「は？」

灰原「だってクラスまた同じじゃない。」

コナン「ああ」

灰原「また疲れそうね。工藤君私達に事件を巻き込まないでね。」

コナン「わりかったなー。」

歩美「ちよつとコナン君、哀ちゃん、二人だけでコソコソしゃべらないの。」

光彦「そうですよー。私達は五人で少年探偵団なんですから。」

やがて三人とわかれ、灰原とコナンの二人でかえっていた。

灰原「まったく疲れるわー。校長先生の話」

コナン「確かにあれはなげーよな。」

すると、いきなり灰原の顔が暗くなった。

灰原「まあ、もう少しでこの生活から抜け出せるだろうけど。」

コナン「ん？それどういう意味だ？」

灰原「解毒剤が完成したのよ。」

コナン「ほっ本当か？」

灰原「工藤君！喜んではいられないわよ。まさか組織のこと忘れてないでしょうね。」

コナン「ああ、わかってるよ。」

よっしゃー！コナンは心の中で思っていた。

## 灰原とコナンの心情

その日、彼とわかれた後灰原はパソコンで解毒剤の資料の整理をしていた。

（もし、工藤君と私が元の姿に戻ったらどうなるのかしら？吉田さん達は私をどう思うかしら？蘭さんは私をどう思うかしら？そして彼は…？）

「よっ灰原！」

灰原「えっ？」

コナン「俺だよ」

灰原「あなたいつからここに？」

コナン「さっきからずっといたぜ。気づかなかったのか？」

灰原「ええ。考え事してて。ってあなた何人の部屋勝手に入ってるのよ。」

コナン「お前はさ、一人で考えすぎなんだよ。たまには俺とかに相談してくれたっていいんだぜ。」

灰原「いいのよ。これは自分のことだから。」

コナン「お前かわいくねえなー。」

灰原「かわいくなくっていいのよ。」

コナン「まっそこがかわいいんだけどな。」

灰原「えっ？」

コナン「いついや、なんでもねえよ。」

灰原「あらそう。」

灰原の顔がまた少し暗くなった。それに勘付いたコナンが「お前さ、動物好きだよな。」

灰原「ええ。」

コナン「今度さ、いつしよに動物園行こうぜ。」

灰原「無理よ。私土日あいてないし。」

コナン「平日でいいじゃないか。俺ら学校いなくても内容わかる

だろ？たまにはいいだろ？」

灰原「それもそうね、付き合ってあげようかしら。」

コナン「本当にかわいくねえな！。」

言ってから、しまった、と思ったが灰原が明るくなってホッとした。  
(なんで俺がこいつの事ここまで気にしてるんだよ。)

自分でもわからなかった。

コナンが帰ったあと灰原はとても機嫌がよかった。博士は何があったのだらうと首をかしげていた。

帰宅途中コナンはさっきの気持ちについて考えていた。

(どうしたんだらうな、俺)

そう思っていると、背後から気配を感じた。危険を感じ逃げたが相手の足は速く捕まってしまい、そのまま気絶してしまった。

## 背後の謎の人

目が覚めるとここはどうやら自分の本当の家らしい。そして目の前には有希子がいた。

コナン「母さん！」

有希子「あら新ちゃんおきたの。久しぶりね。」

コナン「驚いたじゃねーか。やめろよな。こういうの。」

有希子「久しぶりに会う母親に対しての挨拶にしてはそっけないじゃない。それにしても慣れてるでしょ、こういうの。」

コナン「だからって、睡眠薬でねむらせることないだろ。」

有希子「新ちゃんだって蘭ちゃんのお父さんを眠らせてるじゃない。」

「

コナンは返す言葉がなかった。

（こいつにはかなわない）

そう思った。

そのとき

有希子「新しい恋人さん見つけたそうじゃない。」

コナン「違う違う、いくら動物園にいつしよに行くからって灰原と恋人なんかじゃ…。」

有希子「あら？私哀ちゃんなんてひと言も言ってないけど？」

コナン「しまった？」

有希子「そうなの動物園に？お金必要じゃない？」

コナン「いいよ。おっちゃんにもらうから。」

有希子「それじゃ悪いわよこれ持っていきなさい。」

有希子は封筒を渡した中には百万円入っていた。

コナン「こんなにいらねーよ。」

有希子「いいのよ。使わなくても持つといて。あと…これも持つといて。」

とコナンは巨大なダイヤモンドのネックレスを受け取った。

有希子「それはね私が優作に告白されたときにもらったネックレスよ。もし理想の相手が見つかったらその人にあげて。」

コナン「いいのか？んな大事なものを。」

有希子「いいのよ。じゃ哀ちゃんと頑張って！」

コナン「だから違うって。」

そう言っても有希子は笑っているだけだった。

寝る前、有希子は飛行機のため帰った。

（俺って灰原が好きなのか？）

（……んなわけねーか。）

明日は早いので早く寝よう。カチッ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4675ba/>

---

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

2012年1月12日22時48分発行